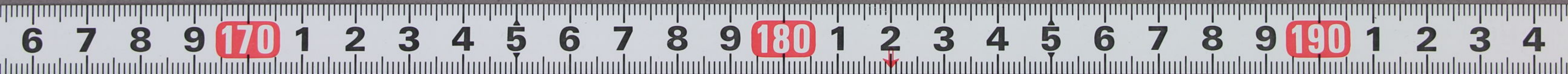


季寄
注解
改正月公博物筌
九月部
三

子
一





九月部目録

△印あるハ能譜
の季と持りかえ

○養生の法。雨風の考。米の豊凶
○妙茶。○季どり。○祭。其外人家
重宝のこゝハ処々ハ数多あり
少目録よりとある事

九月

卦 月支 調子
陰陽生 異名並註 初

△寒露節 三丁 △霜降中 三丁

日令

此部ハ九月日の定アテ
好の定りてある事

○裕 三丁 △御香宮祭 四丁

△鞍馬祭 四丁 目 四京七都野羊並神輿 四丁

△醍醐祭 五丁 △木幡祭 五丁

△不堪田養 五丁 日 八桂宮相撲 五丁

△醍醐宵祭 五丁 △重陽節 九丁

△菊天 △菊節 九丁

△菊花宴 △重陽宴 △菊の酒 九丁
△菊瓶 △茶黄條 六丁

日七 日五



九月 目錄

△菊の着綿きくのもみ 寺てら △佩黄はいわう 八丁はちぢょう

△菊花宴きくげあひら 八丁はちぢょう △酒さけ 八丁はちぢょう

△後のち 九丁くぢょう △京醍醐祭きやうだいごさい 九丁くぢょう

△貴船祭きふねさい 九丁くぢょう △鹿谷天王祭かたがやてんわうさい 九丁くぢょう

△生玉祭なまたまさい 九丁くぢょう △一宮祭いちみやさい 九丁くぢょう

△九日小袖くじふこそで 寺てら △今日菊けふきく 寺てら

△小重陽こじゆうやう 寺てら △近江四宮祭おんえしよみやさい 寺てら

△五條天神祭ごじょうてんじんさい 寺てら △下鳥羽祭しもとば 寺てら

△例幣れいへい 寺てら △御難餅ごなんもち 寺てら

△太秦牛祭たまたぎうさい 寺てら △後名月のちのなづき 寺てら

△後のちの月のつき △豆名月まめなづき △彩名月さいなづき △二夜月ふたよるつき △名残月なごりつき △十三夜じふさんや

△住吉相撲會すまじきすもうかい △室の市むろのいち △州の市すまのいち

△白川祭しらかわさい 寺てら △天寺てんじ 寺てら

△天王寺念佛會てんわうじぶつねいかい △都岩倉祭みやこいわくらさい 寺てら

△栗田口祭くりたぐちさい 寺てら △神田祭かんださい 寺てら

△小倉祭こくらさい 寺てら △岡寄祭おかよせさい 寺てら

△度會新嘗會たごひにいなみかい 寺てら △挂川御枝かきがわごえ 寺てら

△野の宮別ののみやわか 寺てら △掘穴綾祭ほりあなあやさい 寺てら

△撰せん吳服祭ごふくさい 寺てら △山城南神祭やましろみなみかみさい 寺てら

△婆利女祭はれんなさい 寺てら △猿夷祭さるひらいさい 寺てら

△八幡花頭やっぺんはなごう 寺てら △上難波祭かみなんばさい 寺てら

△淀祭よどみさい 寺てら △座広祭ざひろさい 寺てら

△逆神祭さかかみさい 寺てら △天満流鏑馬てんまんりゅうせうば 寺てら

△北山祭きたやまさい 寺てら △津村祭つむらさい 寺てら

△鳴滝祭なるたきさい △福七神祭ふくしちかみさい 寺てら △住吉神送すまじかみ送り 寺てら

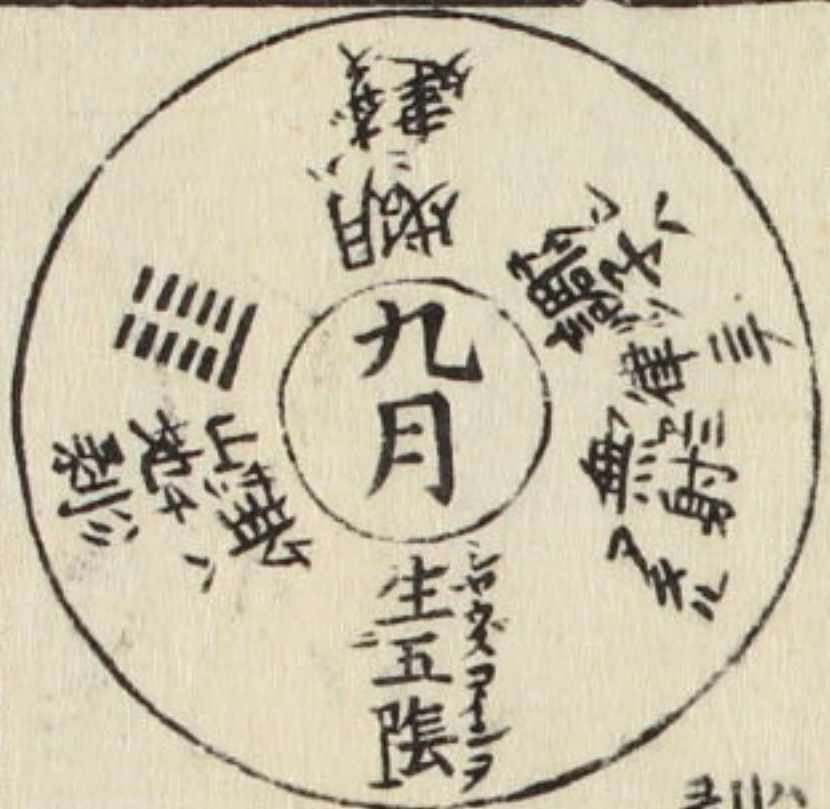
△周防山口祭すおうやまぐちさい 寺てら

△月令つきぎ 此部このぶの日の定さだらざる九月くわがつ

△伊勢御遷宮いせごみんぐう 寺てら △番船ばんふね △早綿はやわた 寺てら

九月之部

△印付さうの生果能諧
李寄出て用果る景物



剥群陰陽と
剥尽す月多
仍て幹木恣
葉とらて枝
幹周る
剥落さるる

無射の陰気外陽氣降て萬物陽
氣の隨ひて出て貪るゝはたへハ
生魚の類蟄伏し草不根小嫩り
潜いこと射るゝ乃て無射と云

異名

△季秋 礼記 暮秋 留書未珍
△梢秋 四時纂要 晚秋 尚府

△無射 礼記 寒露 尚府 玄月 異名
△素秋 尚府 菊秋 事物異名

和名 彩月 紅樹月 菊月

△菊開月 △寢覚月 △紅葉月

△木涼月 △小田刈月 △撒の秋

△長月 可なり八月の口ふさす

異名註

△季秋ハ季ハ末ハ秋の

秋とい秋の暮ハ年の暮とい

△梢秋ハ梢ハ

△晩秋ハ暮秋と同じ

△素秋とい素ハ白ハ秋乃金氣

△玄月とい玄ハクロシ訓黒

○菊秋ハ當月の菊花乃

○藏玉 寢覚月 家隆

○彩月

○紅葉月

○長月

○小田刈月

○花山院

○實隆

○莫傳

○新古今

○藏玉

○寒露

○七十二候

○長短

○小田刈

○花山院

朔京 鞍馬祭 今晨出 神輿渡 御今日

御旅所へ御出九日まをり 契 明神と云。大己貴尊と云まをり

朔大 天王寺金堂 安 宮嶋令 日坂 倉利講平刻音集 藝 日市あり

南 氷室祭。南都四十四氏神々 祭の春日伶人舞祭あり。大知志

○春日若宮御繩棟の式今日あり 若宮御旅所の常日。今日假社宮

二 今日晴るれい來年春雨あり 日あり。今日房事と慎むべし

南 東大寺鎮守八幡祭此祭 都久く退轉ヤゲ京都天明

火災の後故有て再興せしめ あり昔の復つて嚴重なること

三 北斗小御燈と奉らるる信の 日 年中行司 貞世

ふ向らる星のいろはほふふか 三輪より今秋のそり火

京 大通寺六孫王御出。多カ木觀 都 音堂水仕。山城固まくり

四 京 北野羊莖神輿。北野天 都 神祭ハ八月あり。今日絶

今日氏地より 羊莖御輿とて菜 菓と以て神輿と造り渡御のひびき

五 山城醍醐祭 御出今日あり 委一く九日池を

○萱尾明神祭。醍醐のこま みる野あり

木幡祭 柘大神。号々天衣心 骨奠。宇治郡木幡の里有

六 京 高臺院。應忌。大閣秀吉公の 都 政所。高臺寺。方丈にて懺法あり

七 不堪田奏 昔の諸国の田の損 亡ある所々の目録

をして奉かされかつて租税と懸 一々ありありの作ふたへるる田と

心て不堪田と云あり 公事根源 年中行司 け秋の子町のそりぬぬ

（非）而此の多作のふや不塚田 荷子

京 ○久世祭の久世の神社へ久世郡寺
都田村の氏神と云 西の留久世村祭

（三）万葉 やははらの久世の社のまきうそ
りあつてはまきうそと云れり折と

遠 ○中郷祭又飛神祭と云 祭神
春日別太玉命と合せて五社神也

如 上 占候 北風東風吹りへ來年
三月七月米價貴し

日 八 桂宮相撲 六条北西洞院西
小あじとと 拾水抄

京 ○泉涌寺舍利會の湛海と云
都僧嘉禎未ふ宋と持つりし舎

利とつり此日音樂あり泉涌
寺へ台密禪律の四宗あり

○玉水祭の山城國井手の郷
玉水乃里なり

江 ○勾當内侍祭の堅田の浦ふ塚あり
州夜祭へ内侍新田義貞の妻へ

醍醐宵祭 今夜社前を註三
番あり宵宮註と云

九不成 重陽節 △重九 △菊
日就日 節 △菊天

△菜節 △栗の節句へ栗と云へ
昔ハ天子齋殿不出御ありて今日

節會行つて韻と探して文と作
文臺ふ居て講せざる本あり 公事根源

今日と重陽と云へ九ハ老陽の
数なり九九ハ陽重さゆへ重陽

と云ふなり ○重九といハ九九重さ
故聲の應して名づく ○一説ハ

重九といハ是ハ俗ハ長久といハ
同音なれり祝ふなり

菊花宴 △重陽の宴 △菊酒
△菊瓶 △菜萸袋

今日群臣菊酒と云へあり
菜萸の袋と身ハ佩ひ又ハ菜萸

の實の付さる枝を折て頭ふくさめ
ハ惡氣を去ると云 風土記次ハ故夏有

重陽の事并菊花酒造る法故
支詩等委しく日本歳時記より

出で見る處

○二巳端午七夕重陽の昔より

祝ふ右四節も此陽の月陽の
日なり是陽に貴び陰をねらふ

意あり又上三の餅餅端午の粽

長陽の菊酒又栗等其節の物

故是と食ひ又を送るをいして

其日の佳節と祝ふるなり草木子
出たり

○年中行事

内大臣

さうく紅葉おしく日まらうそへて
くみたまふらう酒のさうし

玉葉

新院典侍

秋の多の秋風吹きて九重より
ふかふかとめねまきくはさうら

風雅

慈鎮

かかしの心なきく葉とれあふ
かきひもゆるはるはる

詞 々のあきき。葉はさうらよ。長

月の夕ふ。夕とさうらけき。くみ
さうまき。くみ代とくはる下あ

○連 竹の系ふればそへん葉のみ家祿

○非 かりけのくもさうら葉の花其角

葉切 小まむも果と夕の葉まき

かりけの夕やくふらさく全

○狂 いあへのあはれ公衆の葉の酒

くみ九葉のいついふれ香 正定

菊の着綿

枕草子小九月九日
の菊と綾とすし

の結ふつてを糸らせらうらく云か

此日の式と調んとて前日より花

小綿とまやて風霜と防く為し

り此日菊の開きうらもあひ

綿と菊の大きにいてつらく色と

ほちておらうらもあひさうらうら

今も猶大内より菊乃をまき

うら宮女れ手ぎさひとほし

たまふらう

○非 長給や髪ふゆはて大笑道古

菊のけしき置しそまの綿とてのくくも
おのていさそあまめいれり 相摸

九日 佩萸 クニノオビ
此日茶菓ヲ佩ビ
菊花酒ヲ呑ム

ハ昔ハ長房が桓景ニ災ヲサクル術ヲ教
タル故事ヲ由来トス此事甚論アリ
委シク日本歳時記ニ弁明ス

○唐土ハ今も今日山ふの
菊酒と香の婦人茶菓の
体とあつより 事文類聚不出

菊花宴 キククハハエン
周ノ穆王ノ愛童ヲ
慈童ト云シガ罪ヲ

蒙ハリテ鄴縣山ニ詣サレタリ此
山谷ニ菊花充滿セリ慈童常
ニコノ菊ノ滴リヲ吞シガ終ニハ

百餘歳ノ壽ヲ保チ魏ノ文帝
ノ世ニ出テ彭祖ト名ヲカヘ文帝
ニ此術ヲ授ケ奉リシカバ文帝ヨシ

ヲ受テ百年ノ壽ヲタモチ玉ヘリ
斯ル例ニヨツテ今日菊花ヲ酒ニ

ヒタシテ用ユレバ壽ヲニスト云傳ヘ
タリ委シクハ日本歳時記ニ出タリ

詩 重陽五字對句 同上

捧筵萸香遍 サセテアタシテユカウアテ手ク
臨風孟嘉帽 シムカセモウカノホウ

稍觴菊花濃 サセテサカサキクハユキヤカ
乘與李膺舟 ニヒウスカケリヨウガフ子

詩 全七字對句 詩礎

今日暫同芳菊飲 コンニキハラヨクシスハククノイ
獻酬杯 ケンジュハ

明朝應作新蓬飛 アサウケタニナリダンボト
客中愁 カクキウノウレヒ

詩 重陽之詞 崔國輔

秋葉風吹黃蛸々 アキノホノハニカガ

サラク晴雲日照白鱗々 サラクハキハニダセ

雲カアルソレヲ日ガテラセ クモカアルソレヲヒカテラセ

シロイイロガキラクトニ心 シロイイロガキラクトニココロ

黃女 山カラカヘツテ來タ菜萸
今日登 コンニキハ登

高醉幾人 タカシイタクシクシテ
九月節句之尺牘

重九鄭重々々黄花馥郁偶有

送壺酒客敬待公之曳藜於

叢間催風月與趣連々玉韻詞々

重九佳節○九日○登高日

○莫節○九々良日○黄花佳期

鄭重至祝○嘉幸○致飲

○申悅送壺酒贈孤樽○以

酒壺曳藜寄駕於蝸庐

○來叩蓬戶風月興趣尋芳

玩景○寄趣烟霞連々玉韻

自作口頭吟○五七言之芳韻

九 酒 今日より式事の酒もつめて用よ

世諺問答小も出さう○抑元且の

屠獲酒と用ひらうと桃花菖

蒲の酒と式正の冷酒を食

物本草にも酒の冷飲を宜とて

冷酒のそと用ゆると貴

九 後雛 雛のころ三月の節

非 南カより百てい多ふ雛を風

月と月の中かゆるや後乃ひを雀

狂 長らに産とさりふ入と

杖風小出ら後のひなう那 負柳

九 京 醍醐祭 下醍醐長尾天満宮

日 都 郷中の氏神

○上れいご清滝権現の護法神

もふ今日神輿と渡と下れいご

天神の社頭小能ありの笠取山の

山上山下の鎮座

雲のくもるをさしとをふあつた向、
望みの清浄のまや 慈鎮

九日 貴船祭 祭神二座高麗。
奥御前。当社ハ龍

徳の無跡ふして雨と祈り雨を止
ひふ事と祈り御神あり

新古今に不田のうらほさうせ
うせせせせせせのうの林 如慶堂

九日 鹿谷天皇祭 浄土寺村十禪師
まうらとまうら

祭昔ハ廿四日なれども今ハ九日
う京銀閣寺門前ふ十禪寺社あり

中村祭。長谷の内なり夜ふ入
行り故俗ハ盗人まうらといふ

九日 大坂生玉祭 祭神活玉神今
日流鑄馬等あり

九日 河内一宮祭 平岡神社と云祭
如和州春日同神之

科長神社。祭ハ六月八日九月
九日山田村東條あり

肥前 長壽諏訪明神祭。傘針
前踊等あり甚だし十日ハ鹿解

と九日ハ供いへる鹿とて各様
殿かて鹿と看とて酒と吞とつら

播磨 明石大倉谷稻舂神社祭
磨祭日ハ三人牛ふ乗つて社頭ハ

森ハ例式わりゆへハ牛衆祭
とつとつあり

九日 天氣 九日ハ晴と至る雨降と
少はし晴るハ冬至並

來年元日兩日晴天と冬中小雨
も少なり若雨降ハ月中降はくハ若

降るハ豊年ハ兆あり○終日東北
の風ありても豊年ハ西北の風ハ來年凶

九日 小袖 御湯殿記曰九月節
句よりニッ襟と云今

日より縹色小袖と昔と小袖と
ハハ縹入まのこころあり

十日 菊 後日菊ハ節後菊
△残る菊ハ残芳

十日 菊 後日菊ハ節後菊
△残る菊ハ残芳

十日 菊 後日菊ハ節後菊
△残る菊ハ残芳

狂冠の礼とたしてのそくく
めとさなり初はるるたり 百二

十京 ○六孫王権現祭。八條北大通
日都 寺ふあり六孫王經基公と祭る

二十御難餅 ○日蓮上人七字の
題目とともへ一流

の宗門と立て安國論と著へして
諸宗ととる故平の時頼怒て
伊豆不流と三年とて免れ鎌倉
不帰と尚諸宗と誹ふよりて弟
子ととりふ土の牢ふへて文永八年九
月十二日鎌倉龍の口くく處ふて
首と刎んとす時頼の子これと憐
とて死罪とせむ佐渡の目小流と
其後大赦ありて帰る上人遷化の
後弟子の僧竜の口ふ寺と建る
これと龍口寺といふ今日叅詣
多し像の前不食と供ふ今日日
難ふあひなき日ゆへ今日とま
る餅を御難餅といふなり

二十京 太秦牛祭 ○太秦廣隆寺
といふ桂宮院

内小加蓋神あり大酒神と云聖
徳太子川勝ふあふて建る丸く

摩多羅神と祭る日あり上宮
王院の庭ふ於て紙の衣と着て牛

ふ乗て高声ふ祭文とよむ此祭文
甚奇と委り追て補遺ふり守

排え抱えよれ流して牛系 素堂
牛系と名くのなり皮つる 桃隣

二十大 ○多武峯祭。田身嶺ふしが
和本殿の中央大織冠鎌足公へ

三十 今日晴れハ暗久しとて残
綿とると多○雨降ハ冬雨雪多し

後名月 △後の月△豆名月△栗
名月△二夜月△名残月

△十三夜。此夜の月と賞とる事
寛平法皇より始るる保延元

年九月十三夜ふゆ雲つとる
月明く明月無双のより仰

狂年若一以経のいれあふれ
これこそ人の宝ありたり 貞柳

三十 京 白川祭 祭神天満宮白川村南
の方有知生主神と守

四十 大坂 天王寺一乗會 昔の今日
修行地

ねれも今の絶よりとせ中世より
十五日大念佛會を行るりく

五十 大坂 天王寺念佛會 今日未
刻六時

堂を修行と太子の鷹鞆と六
時堂よりや奉り舞樂あり當寺に

て涅槃會聖冥會今日の念佛會
これと三大會といひて嚴重り

法會より俗ふ△柳祭とソム
○三津八幡祭 ○玉造稻荷祭

五十 京 岩倉祭 北山の岩倉山より
あり祭神十二座

あり北岩倉大雲寺の鎮守とん
昔の王城の四隅に岩倉ありて社と

れて帝都の守護と守是の其一
あり祭礼夜に入神供と奉る

五十 京 粟田日祭 午頭天王と祭
る餅十七本あり

登り粟田御殿に入り夜に白川
橋と越て知恩院さういの細き

板橋と渡るりれ上りて餅の曲
持あり甚面白とてい

五十 江 戸 神田祭 天平二年小大己貴
命と鎮座往古に

神田とて国々大御宮へ初穂と
納むる御田あり大己貴命の五穀

の神さるの右神田よ此神と祭
る其後延文の頃より將門の灵

と本殿のわさりの祭とて今二
座と守祭りの隔年とて子寅辰午

申戌と山王祭と此祭と江戸の大祭と守

非 此は神田祭の神田祭系李々

五十 豊 前 小倉祭 祭神三座應神
天皇神功皇后玉

祭神三座應神
天皇神功皇后玉

依姫より十四日神輿より殿小渡御
やまより夜分後より十五日祭入

六十 山城岡崎祭 東天王の社と云
西天王の社の吉

田山の麓に有鉾七本あり神輿
先達てゆく是と鉾とすつくとす

其内一本の鉾鉾はバの上ふ土とて
つ々大鷹とみく名づもて大鷹

の鉾とつて神室とす 雍州府志出
一書祭祭ハ九月十五日入しつ

○伏見三洲祭。天武天皇と祭
る又午頭天皇もつり十二日御出

○岩屋明神祭。神体宮道祖
神ハ山科大宅村の東ふあり

六十 度會新嘗會 神嘗祭
今日

伊勢外宮へ天子より新米の初
穂と供し度會といハ伊勢外

宮鎮座の處の名あり内裏新
嘗會と同一く俗小御祭

と稱し明十七日内宮ふあり事
実外宮と同一事なり

○非をそと名かじりヤ新嘗會
新米涉ひるふせのえかす東巴

六十 江の神明祭 十日より十一
日 戸日迄祭礼の間甚賑へ

寛仁二年九月十六日此處小鎮座
あり生姜の市あり参詣の人

兼生姜と求めりり家毎小糠漬
の中へ入漬これを喰へ年中

邪氣感胃此愁ひ旅のかふと
り俗小生姜祭といふ

六十 堺大丹波祭 大井大明神
祭

桂川御被 桂川ハ大堰川の末
流と松の尾より

南に桂川といハ伊勢の齋宮より
立ち上皇女明十七日群行ふあり

前桂川といハありてくあり委
く次の野々宮の別の丸ふあり守

七十 不成京。諏訪祭。六条鳥丸と
就日都。室の間の丁ふあり

野々宮別。伊勢大神宮へ齊
宮ふらうせうの内

親王三年々間野の宮小こりり
物にしまひて勢州へ旅立ちふ

其と天子まらう。櫛とらて
齊宮の頭ふさせうふと別

その櫛とら野の宮のさうは
つふこりうせうふ野の宮とこ

うれてつれへ行ふとつふ野
の宮の小倉山の辰己なる藪の内

小古跡と残し。これとも古の處と
ト定めてこりまらひし

野の宮の古跡象々ふあり
齊宮のこり後鳥羽院の御

宇は絶ふり

七十 撰津穴綾祭。池田の民家の
北山上ふあり綾

羽大明神と号す應神天皇卅七年
百濟より呉の国の緋織女四人と

そつて織しめあひし。今呉服と
つふ此呉の国の者れ始めとら

なるゆふり又和訓ふらうする結
とはさうとつふ此あやとつふ綾

と織さる故ふ名づくるあやとら
の畧く此地祭とて應神天皇

仁徳天皇乃みまこの地をれと
ひらるる

あやとらひめとらとらひれり
あやとらひめとらとらひれり

非 兼淡み水もらやその星系鬼貫
年ひよらうとこれとれ系か支考

八十 今日遠く行く事とつむ道ふ
てそ支えてたてま守れに至りて

八十 撰津呉服祭。池田の田圃
の中ふ祠あり

穴織の祠ふ隔つる十町むら
事実前ふつふけ祠あるいひ

くれ結をうさる地なるや池
田をくれとの里ともいふ

八日 大令宮祭 やぶらりり祭
神五座あり

○天王寺廻廊立花。十七八両日
○高津宮祭。夏祭六月十日

十日 京南禅寺亀山院御忌
都妙傳寺七面明神開帳

今日齊戒沐浴して心と淨く
そいの吉事と得るあり

十一日 山城城南神祭 祭五社
の鳥羽中嶋壇

上。塔森。石倉。竹田。小枝の土人産
沙神と守むる鳥羽上皇乃離

宮ありて是と城南の離宮や
いひたりと城のともふあり

ゆへなるをいひ今鳥羽帝と
ありてまらるといふ

十二日 波利女祭 高辻室町西
あり俗小繁昌

の社といひて子孫のさうと祈る
より此社の婆利女をいひて
いひ誤りてハニヨといふ又それを
云あやまらうて繁昌といふ

十三日 京都旅夷祭 建仁寺門前
あり榮西国師

勸請もろ外もて旅行の海上
にむく人の先つ此社を参つて風

波の難をうへん事といひゆへ旅
をいひとといふ一説十六日といひ

つうたかへくといひく諸国祭
礼記いひて寸面自といふ

十四日 山城八幡花頭 社僧弟子髪
剃り衆より

時草花と製し酒宴催す花の
臺は六月の日とありみてはらう

十五日 龍の改葬のころ天窓山
来山

十六日 今日杞柳の湯をゆあそ
無病長命ありといふ

北一 京 ○天道社祭。五条坊門猪熊有

北一 都 ○栢社祭。灰方の南林の内。有

北一 坂大上難波祭。俗小稻荷祭と
博旁町あり

本社ハ仁徳天皇と祭きり稲荷ハ
地神として本社のかごり鎮守六

月の御抜神興御旅渡御甚賑
今日秋祭として神馬の渡りあり

北一 江 ○根津権現祭。隔年あり

北一 戸祭神委く博物筈ふ出せり

北一 山 城淀祭。小橋の乾ふあり淀
姫神といふ傍ふ

観法師の宮あり又一座伊勢
御門神祠といふありて納所楊枝

島小橋の東河中ふありこれと撰
社と淀姫の説まらるあり又小

橋の北ふ大荒木社とあり同日
神事と寺又水垂ふ淀姫明神と云

ありて廿三日神事ありつる是
ありと伝ふ

北二 坂大座摩祭。根州西成郡の
惣社といふ今

日の祭と相掌八十島祭といふ口
傳へ六月廿二日御核の時神興御旅渡瀬

北四 河内 ○植松村逆様祭。廿四日と
祭礼して廿五日と宵宮とす

北四 江近逆神祭。大津相坂關清
水大明神蟬丸の

宮と稱す此丸古歌ふ詠する関の
清水の旧跡るるよりい傳へて

此宮のあり外と今清水町と稱
と此宮の別當と近松寺と号し

て諸国説経者の本地といひり
淨と説経と以て世とてる者

此寺の免状とらひたるといふ説経
者日暮小太夫請る正徳二年乃

免状とらひたる見たりまの
日説経者来ると神興と供奉とて例と

北四 山城木幡祭。むらひ今日あはれ
今日五日とす

不成大天満流鎗馬やぶさめの式しきあり

北都北山祭洛北衣笠山世寅乃林中ちゆうちゆうあり六所明

神しんとつふ又北山天神祭とつふみづみ拜殿らいてんあり

北七坂大津村祭津村御灵祭鎌倉権五郎景

政の灵と祭まつり故小五郎の社やしろとも

座まあり

北八都鳴滝祭福と神祭福王子社鳴滝社と

合祭あひまつりとつふ福王子の初めはつめ歩

荒神あらいがみと云いうが福王子と轉化てんかせ

とつふ云説あり神体かみハ光孝天皇の皇后班子を祝いわひしんまとつ

とつふ京俗きやうじやくこれこれを五器ごきありありひ

北八東山大谷報恩講北七北八見醒さ井い荒神祭あらいがみまつり油小路火の尊祭

北八大六日おほろくにち天王寺舍利講おんあまのてら音樂あり

北八坂さか晦日くわいじつ石の鳥居いしのとり神送り

北八小こささいいのの廿九日にじゅうくにちととすす今日けふ風雨あり

北八日ひといい水難みづがたあり今日けふ能よ々々身みとと恨うらみ心こころ

北八日ひ今日けふのの夢窓国師ゆめそうこくし忌い天龍寺相

北八日ひ今日けふのの夢窓国師ゆめそうこくし忌い天龍寺相

北八日ひ今日けふのの夢窓国師ゆめそうこくし忌い天龍寺相

北八日ひ今日けふのの夢窓国師ゆめそうこくし忌い天龍寺相

北八日ひ今日けふのの夢窓国師ゆめそうこくし忌い天龍寺相

北八日ひ今日けふのの夢窓国師ゆめそうこくし忌い天龍寺相

北八日ひ今日けふのの夢窓国師ゆめそうこくし忌い天龍寺相

月令

九月 月中 小預り 雑事 景物 を 出せり

伊勢御遷宮

内外 兩宮 社の 不 振社

二十一年 を 歴まはせり 造營 ありきり 九月 を 見

つゝ 御遷宮 の

月 と さ ぐ ま する

番船

△ 繰番 △ 早繰 △ 追繰 △ 浪花 まで 當年 の 新繰

一時 小菱垣 船 小積込 出帆 の 吉日 と 定め 繰 と 解く 前後

乃 番 と 圖 と 取て 定免 同日 小出帆 と 江戸 着岸 の 前後 と 争

ひ 少く いても 早く 着岸 すると 手柄 守 出帆 の 見送 餞別 小船

おて 種々 祝ひ と 送り 去り けり 浪花 まで 繰船 近世 十月 小出帆

跡より 出せり 新繰 と 積む 船 と 云

あり 追繰 番 とも 追繰 船 とも 云なり これ 十月 乃 季 とも

し ても 可き こと あり

俳 番 舟 や 杖 を 甚 記 あり 鬼 貫

ま 舟 の 出て 月 教 あり けり 午 川 番 舟 や い 名 勢 とも 化 あり 平 刀

落水

○ せき 落 と 水 も い 田 の 実 の う け たり 田 水

ふ 氷 と 切 けり 事 あり ち とも けり 稲 よく とも けり

俳 落 一 水 考 考 一 日 仕 業 たり 茶 雷

一 淋 と 一 日 仕 業 たり 一 日 茶 雷

海嵐廻

海 螺 の かつ 糸 と 巻 席 の 上 に 廻り 打出

た 勝 守 兒童 の 戯 三 日 目 日 並 記事 あり 九月 九 日 小 限 る 夏

秋 冷 の 節 より 久 へ けり 小 翫 大

新綿

此 頃 新 綿 吹 出 せ 賣 買 とも 故 季 とも

小方の露は秋の気さきおゆく。霜はあも
えや霽とるも初。時雨は冬さといそく
⑤ 非 仍好やエエのくつら更ぞ杜徳
⑥ 手は花枝をなれり起る意 峯雪

⑦ 商人惜秋

柳牙

あはれ人もさき秋のまんまんと
よらけふむしの秋ささくらん

詩 暮秋五字對句

望極関山遠

菊枝花半在

秋深烟霧多

霜樹葉全稀

詩 全七字對句

詩礎

半山雲影前林雨

水痕收

十里風香晚稻花

山骨瘦

詩 季秋之詞

王維

新溪白石出 荆溪白石出 天寒紅

兼市 空翠濕人衣 山路元無雨 山山

九月盡 九月晦日といふる古

の事 九月の暮 今九月

月晦日といふる

詩 雨中九月尽 公任

今よひさくらむやとせよ

新古今 閏九月尽 大政大臣

詞 今秋の秋。今秋の秋。今秋の秋。

秋の秋。秋の秋。秋の秋。秋の秋。

秋の秋。秋の秋。秋の秋。秋の秋。

連 春日さあぬ多秋とく秋葉養

菊の依以てこれの黄色形せり

①寛平菊合 薄き草

庭のさこの方依てふまき草
ふゆひー種依てふー葉

藏玉 星見草

庭のさすくしてふちや星見草
まろふらふ依離よそふ

秘藏 かりく草

さつひこま並武宿のませの門か
かりく草依てふらふかりく草

藻塩 ふゆ草

夕陽 けしき草の依のこま
これもさつひこの依ふつまし

篠目 けしき草

秋のさく花のさくや依てふらふ
名の依てふらふ依てふらふ

莫傳 霜見草 此名古今集より

心あふふとふらふ依てふらふ
依てふらふ依てふらふ

藻塩 いまて草

長月の九月さく依てふらふ

さつひこま依てふらふ

○秋無きと依てふらふ

小抄の依てふらふ

花の依てふらふ

かきこふ依てふらふ

藻塩 秋志く花一葉

あさちふ依てふらふ

所小抄の依てふらふ

○獲我菊の依てふらふ

かきこふ依てふらふ

かの依てふらふ

あさちふ依てふらふ

①新勅撰 月前菊 右大臣

ゆきておの依の月依てふらふ

まろふの依の依の依の依の依

後拾遺 翫宮庭菊 長房

菊の依てふらふ

えゆの依の依の依の依の依

家集 菊関中友 行宗

秋のうへも我れゆひにおおむつ
こゝろと老の友とさるるを

詞 山崎のさく。秋のふり葉。もろの

さく。葉のしずく。ちとせの花。八重葉。

八重かざられた花。あまうらうらふ。

葉のまじ。ちとせの菊。菊の約あ。

廣く吹上つ後。経表のさか。あいろ

の流。池のふくせの秋庭ふらふ。

ちびの池。下木。菊の下あ。花乃

下木。老とせ。ちとせのさく。

をそとらひとのさ。ちとせの秋

うらふ。霧。ちとせのまじれた白ふ。

ちとせのまじ。くさる。白ひもさる。

祝。いく千年とらひとのさ。ちとせ。

秋。かきりさるさよのひ。露。ちと

ちとせのさく。ちとせのさく。ちとせの

かきりさる。ちとせのさく。霜。ちと

かきりさる。ちとせのさく。ちとせの

ちとせのさく。ちとせのさく。ちとせの

ちとせのさく。ちとせのさく。ちとせの

ちとせのさく。ちとせのさく。ちとせの

菊のふりも菊ふくふとよとよと
九月九日のふく十日よりの秋菊

よつてさかるといふ九月の。秋菊の

とよふ秋の末又冬のさくち

はもよあり。ちとせのさくち

ちとせのさくち

連 菊さけのさくちとよとよと

ちとせのさくちとよとよと

非 菊さくちとよとよと

ちとせのさくちとよとよと

ちとせのさくちとよとよと

ちとせのさくちとよとよと

ちとせのさくちとよとよと

ちとせのさくちとよとよと

ちとせのさくちとよとよと

ちとせのさくちとよとよと

ちとせのさくちとよとよと

ちとせのさくちとよとよと

ちとせのさくちとよとよと

ちとせのさくちとよとよと

ちとせのさくちとよとよと

詩 菊五字對句

露凝千片玉 曲池潔寒流

菊散一叢金 芳菊舒金蕊

詩 今七字對句

植處清香依玉砌 青玉潤

摘來泛盞滿金樽 碎金香

詩 白菊詞

濃露繁霜着似無 魏舒

何須更着螢兼雪 便好叢

邊夜讀書 夜讀書

菊合

殿上人の御遊をいさへを

城天皇大同二年九月幸神泉苑四

位已上共校菊花昌泰三年詔待臣

菊花香

さくさくと炷く

術妙

仙茶の方 黄菊と茯苓と松

菊品類 程々菊 小握々

貫 黄色 銀目貫 白小 銅目貫

大般若 大般若 黄大般若 黄大

とと大般若 薄色千

かきまろのいり日存小紫こむらさき

かじ紫かじむらさき鳳凰ほうおう黄いろ

常盤とこひら白しろ紫むらさき小紫こむらさき花はなのの黄常盤おうとこひら

盤ばん千重黄せんじゆうおう桐壺きりやう有明ありあけ

百十重ひゃくじゅうじゆう櫻菊おうぎく銀ぎん

緋ひ白中しろなかつ三川咲分さんせんさいぶん黄おう三川咲さんせんさい

仙臺咲せんたいさい唐車からぐるま

大いん花形たいいんはながた九く天人てんじん唐車からぐるま

二重にじゆう天下てんか天人てんじん初心しんしん亂らん

猩々しやうじやう一重いちじゆう猩々しやうじやう小いん

石山いしやま大朱柿たいしゆし大いん

郭公くわくこう三井寺さんせいじ

黄咲おうさい未摘みそと半はん三井寺さんせいじ

白しろふらぶらふらぶら三井寺さんせいじ

白しろふらぶらふらぶら三井寺さんせいじ

○此外△白菊△黄菊△万菊

△大菊△小菊等数百品あり

○菊品といふ本小いんき

いんいん爰小畧と右菊品といふ

本ハ花形大圖はながたいんいん分毫ぶんごう

たがぬたがぬかうかう小いんこいん堂上方どうじやうのの御ご

哥かとんとん久く且かつハ菊の植うゑ中ちゆう花はな

の咲さ一いち中ちゆう小いんこいんをを委あづか一いち記きと

地榆花ぢいうげ割木香わりきかう吾亦紅われよくこう

葉藤はふとう似に花千日紅はなせんじつこう

○非 吾亦紅われよくこう赤砂せきさ花はな小いんこいん土川つちがわ

川芎花せんきゆうげ本名ほんな芍薬せきやく一名いちめい蛇へび

黄芩花わうじんげ一名いちめい赤金せきこん枯腸こじやう花はな

色又白色いろまたしろいろ也なり

○非 山乃やまののの花はな黄芩わうじん花はなをを小いんこいん由よし

岩菊花

花黄一カ多クあり
まり咲きて泡の如く

されバ一名泡きくも云立花の
と留るに用ひてはあまの類

葉の表青く背白し

俳泡 泡きくはあまの類

蘆穂絮

二百余年前永禄年
中まで木綿の日本へ

種と渡さず夫故真綿の外小綿
と云物は勿論木綿もは布小穂

絮と入て下賤の者の布子とて
着るよりして今も江戸にて

中入綿とホウレイ綿と云穂入綿の
轉化也之蒲團も蒲の穂と因

て造る故の名今も大坂と木
綿と織と布とせりと云右の記

それらもみよみよ母のまゝに
つらあこれ花もつらあ 光俊卿

俳子 俳子 俳子 俳子 俳子
右歌俳の故事と會してより決す

穂絮故事

孔明ノ関子騫と
云人母先タテラレシ

カバ父後妻ヲムカハラレニ関子騫
至テ孝行ナリシカド繼母ハ二人の

我子ヲ愛レ繼子ノ関子騫ヲ深
クニクメル餘リ我子ハ真綿ノ衣

服ヲ着セ兄ノ子騫ハ芦ノ穂ノ入
タル衣服ヲ着タリ父コレヲ聞て後

妻ヲ去ラントイハレケレバ子騫
レヲトシメテイハク母在セバ一子寒

ク母去ルトキハ三子正ニ寒シト云テ
母ヲ去ラルトテ止メ玉ヘト冬練

薄散 △尾花散△枯尾花△枯尾
花と云ハ枯る薄と云ハ穂

が獸の尾ハ似たり故尾花と云
る 幾十載 秋仲末と記して長月や

未世の尾ふうと松ふあり
能好 此の果ハ尾の油と云

椿實

本字海石榴 和名妙出
皮とひき仁と取ちりて油

枳殼 人家垣植る（非）かきまの
やくてまふとこころかま
法印

楤蒔 一ルメロの蜜名之其実初め
生さる時毛あり熟るとれ
ハモカシ信州ふれ尤多し

南天燭子 実の赤小豆の如く數十
一かまういさうてあり

嬰子桐實 天然挂の実あり
どの木と云ふのこ

皂角子 和名皂莢△西海子。
大木あり葉の楓（非）似

木寮子 葉の藤のじ（俗）俗小実
とツグといふ是と念

珠 小作の少一名菩提樹（非）と云
るるべー此実のわらて衣と

菩提樹 葉共小椿（非）似（非）と云
又一名無患子葉の冬

川棟子 俗小此花と棟といふ
真の梅檀とい大不異

桐油實 実九く大く油（非）ふふ不
或ハ漆（非）ふかへてり

嬰子桐 虎子桐と云是之

名づく能邪氣 とこころ云（秘傳）
花鏡
今ハ京永觀堂もありとを

青 小似てや（非）尖長し実ハ枇杷（非）に
似たり念珠小作（俗）小鬼見愁と

用ゆ 法あり其功荏油（非）小似たり

本州 嬰子桐虎子桐と云是之

（非） 我の船（非）と云ふはわたり杜國
せんえの夢（非）と云ふ果るる百州

（非） 我の船（非）と云ふはわたり杜國
せんえの夢（非）と云ふ果るる百州

（非） 我の船（非）と云ふはわたり杜國
せんえの夢（非）と云ふ果るる百州

（非） 我の船（非）と云ふはわたり杜國
せんえの夢（非）と云ふ果るる百州

（非） 我の船（非）と云ふはわたり杜國
せんえの夢（非）と云ふ果るる百州

（非） 我の船（非）と云ふはわたり杜國
せんえの夢（非）と云ふ果るる百州

（非） 我の船（非）と云ふはわたり杜國
せんえの夢（非）と云ふ果るる百州

椶實 木の椶の木小似て木一
種変生するべし実も又

同一熟して黒く味甘し小鳥
好んでこれと食ふ葉ハ物と磨

こし幹ハ初く守株と截盤持盤
と念珠小も作らる用とす

華甚多一ツも大木とみけ
椶の實ハ此とさうかや電白羽

椶櫚實 高木あり花木瓜小似
さう実ハ椶櫚小似て

るぐく花ハ愛とへ
能ハわけはれもかめけて多きこれ代

榲實 又杼とも存但種類ハ
實と結ぶものハ榲

此実の名と椶とかわして和名つる
なごん黒色と漆る物ハ椶半と

つるて栗より大きく葉の太
さハ七八寸なり以て栗の同種異

物あり遠国山家これと類と
る小椶とさうら延と手元の甚

せりきりの故世の諺ハトチメン
椶とさうと急るるこのたごん

つる葉ハハア手小似たり
山ふくも水せりて水とせん

うろくさうさう拾ふ程 西行
能とらけ実や一字と落す天経其角

老母草實 実熟して赤し四時
葉凋す守故ハ万年

青の名ありて唐ハ嘉祝小似る
ら守用也と花鏡小見えたり

栗 能ハ此のやに秋の初めこの千代
る小掬ハやとほむの實史方

栗子 異名 河東飯 天台道
果事物 砂糖舶来せざる

先ハ栗子の果菓の最上より漢
土ハこれと貴しと見え唐の

李商隱ハ雜纂ハ富貴の鉢と
云ハ小栗の皮と出せり干て細

て搗粗皮と取らる搗栗と云
盤と打らる瓜打栗と云

故不推と云りて実のこら
るる木の一名鐵櫛と云り

①非 豆の二足推の附る所尚白

椎柴 △推の葉△推の小枝
△函て推の推柴と云ハ

推の木の実ふりたるを推
至て小枝の多き物ゆ山人の切り

て柴ふりたる併いして柴ふせど
るも椎柴とよめる事あり

②非 秋と云哥ふ冬の題小読み
△よとは推の推の大方なり

③哥 後撰 けしむと根さうるん美香
のさうる山のしひるるふん

捨遺 美香のさうる山の推柴の
さうるんさうるんさうるん

團栗 榎の実さう①非 せんくふ
休宜の眼さうる子響子ひ鬼貫

新胡桃 核果○陳倉巨室
一種山さうる鬼さうる

とつの上品へひちるると云ハ此中
雜りて甚皮薄くて破やと

○唐の白胡桃とつるもの
あつるや李白の詩あり

紅羅袖裏分明見白玉盤
中看卻無疑見老僧休念

誦腕前推下水晶珠 赤キツ
ニアリテハマキラカニ見エトモ白キ玉

ノウツハニアリテハ見ワカラストウヤラ
老ノウカスイレヤウノジユスラツニケルヤウナ

新榧子 大木多し木小北と牡
とあり各花あれども

牡の実と結ぶるとは北の枝横か
たは牡の枝上へ起さう

④非 榧のさうる吉のふよ油絞紹藤
あやの実れども齡さうるふられ暢中

新松子 松さうるもつふ又松ふ
さうるも所ふさうるさうる

又松の実とつふさうるさうる中か
さうる是と仁さうるさうる

水木子

喬木之葉梅りたる
のこく 花藤りて黄

也実も梅りたるく攪り生じ
非 火とりてそいぬおまはるは世 井蛙

菜萁

○山菜萁○食菜萁
○呉菜萁○つとも種

類より春細き黄花開き秋紅きもの
非 種はるておとくをれ小ぢふ 水音

瓢樹

蚊子樹 又イスノ木とも
いへ其実と蚊のやうくと云

葉ふふまき出さる物瓢箪のさ
く 胡椒の粉の器をいへも用也

又吹けの笛の音あり此木は火
災と除きく火と附けと葉より

風で吹出さる火と避く故庭砌
の生垣ふまふらるる 元火除木

とついでいへヒヨケの中畧えとつう
非 いんの垣をよとてをまつぬ来山

榎實

胡椒の大くそいて味
あまき鳥よくとあり

まうてらうふ

非 房の枝の実ふたさるは葉も葉

熟柿

△鳥柿○つとももあ柿
と干して製しる物也

柿ハ三秋の部も出せり
非 腸ふ社のりるま白くは考

無花果

古名 花をさるもの
俗に唐柿といふ

花をさるて実のつ其実枝間ふ
わり状木饅頭のこころ

鷄舌

本名 白英○一名鬼目と
いふ 白英の花ふつと

ての名るる鬼目の実とつう。
又ツクミイロ子ともいひよぞり

好んこ此実と喰ふ人
非 かりてさるるをいへるは宗因

仙蓼

本名 珊瑚葉とかく俗に
かりたるをいへるは実の

赤く小き丸珊瑚珠のおとく小
まの鉢をいへるは愛とていへる

○枝の節葉のまじり 故に仙夢と
異名とする所の本邦とてい実名と
るなり又仙霊ともかくし

○非 仙夢の實不辨うへのもひか三惟

晩稻 △遅稻 △晩田 △いづれも
おとく実のう稲あり

○非 稻のしほとち喰田つふ支考
松尾の一衣いさげ喰稻外支龍

漆子 △漆搔 ○漆わらてび
まも同訓あり汁の木

よりそ物とわらへ子ハ絞とて
蠟と守但し木ハ異種ありて

子と汁と取ら別あり

○非 木の枝ふ女當りじ漆子の宗因

紅葉 赤葉とも云 異色 △色見州
○妻恋草 ○錦州 出

木の葉赤く又ハ黄ふありとて
つハ紅イツルとけめてりつと

つよ此詞と体とて紅葉と黄
葉ともかく此ころ色づく葉ハ

○櫛 ○楮 ○楸 ○白膠木 ○漆 ○蕪
○柞 ○蒨 ○櫻 ○梅 ○合歡 ○あやこ
さの類あり

右の品々紅葉とつれが九月の季
なり其内櫛の紅葉ハ別して人

毎ハ賞する故紅葉といハ櫛の
事くより哥ハ楓ハむぎん諸

木の葉の赤くると紅葉と
つり又紅葉とるても楸の

うき又ハ志がれは漆と楸と
よもても紅葉のこもるなり

○楓 ○ひさだ ○ちまも ○まゆ ○こしら
等ハ七月の草木の部ハ委し記あり

哥 古今和歌集紅葉の哥へ
さほふのちその紅葉ふらうめを
よるさへんそとてす月さけ

たぐふの岩ふたみまらうめへ
照る日れひうらる時きて
三田川を流るる水とてあらう
つらうらみき中や終なるん

夫木 △葛の糸

つとのこゆりの中ろふちふ葛も
秋うぢれい色うりゆく

金葉

源師賢

ちきこれ指やつこおつま

皆その糸の紅葉いけり

夫木 △葛の紅葉 家隆

つこのこゆりの糸糸いけり

都小おとまう川のふり

新古今 △楹紅葉

引つゝ鳴かすのわたるは紅葉

ちいぬ斗ふ地風そふく

夫木 △松の紅葉 顯照

松をけふつふ時おのりあらん

忘下指まつさみちせり

全 △まゆこ紅葉 知家

入志れを紅葉いけりみまら

細川まゆこつりいれん

詞 本の下りさう。本はあき

をのちさ。枝のりさう。すく

芳のじほ。梢の紅葉。かう後。お
の下深。柏のもさう。まさのゆ

△紅葉ふむ△下紅葉△水の紅葉

△さきうりる△ゆり紅葉

△紅葉物 山後よゆりてさう

△川紅葉 秋さるべー冬ふり

△紅葉り川らり ちをさう

△紅葉燈 これい白赤天々詩より

詩 林間煖酒焚紅葉 白樂天

△紅葉散 哥ふれ暮秋ふりくち

ちんてい初冬よさる 能の季九

月も十月も廿り△紅葉ささう

りる又△紅葉り川らりい九月も

紅葉らりい十月もさるべー

△紅葉の喜 是いさゆの菊の盃

△紅葉の賀 花のありかさの

めさる所もさう賀といふ

能 紅葉もまつく後のおま

支考

系小流す小流さや紅葉る東巴

魁の死せりきお系多梅里
 露王のこぼりしお系多囊中
 母親の枝のお系合点せ貫玉
 拂紅系親入八坊の雲山あり野明
 負ぬるの枝よつらるる時 釵夕
 蟻燭ふぢりても赤い握り紫李坡
 狂うては獲えきくくる尾山
 けおとられらる余愛のお多々木端

詩 紅葉五字對句

林端散餘綺 似燒非因火
 木杪絢殘霞 如花不待春

詩 全七字對句

紅霞迥遍吳江內 殘照晚
 錦綺粧成蜀道中 斷霞秋

詩 紅葉詞 杜牧

遠上寒山石徑斜 白雲生處有人家
 停車坐愛楓林晚 霜葉紅於二月花

尺牘 餽紅葉文

假山之楓光色欲然
 折數枝以獻左右
 但恐散飛愛護為妙

尺牘 昏替ヲ記ス并ニ註解

光色欲然 楓樹掩映燦爛

楓葉潤色紅燁々

○ 霜

楓カエデ粧カサネ色イロ熒ヒラ紅ベニ

折オリ教カサネ枝エダ以カサネ獻カサネ

左右サマ

為カサネ折オリ一ヒト枝エダ獻カサネ枕カサネ鑿カサネ○

多オホクニ庭ニ幾ニ枝エダ聊カサネ效カサネ芹カサネ意カサネ○

圖エ隅ニ固ニ之ノ根ノ為カサネ折オリ一ヒト朶カサネ當カサネ

野ノ獻カサネ但カサネ恐カサネ散カサネ飛カサネ愛カサネ護カサネ為カサネ妙カサネ

艷イロ妍カサネ不カサネ耐カサネ數カサネ日カサネ移カサネ竹カサネ筒カサネ厭カサネ

風カサネ霜カサネ

色カサネかみ松カサネ諸カサネ木カサネ秋カサネ小カサネあひて

色カサネかみ松カサネ枯カサネるカサネ松カサネのカサネ

色カサネかみ松カサネ賞カサネでカサネ

哥カサネ夫カサネ木カサネ

千載

藤原朝仲

色カサネかみ松カサネ風カサネのカサネあひて

色カサネかみ松カサネ賞カサネでカサネ

色カサネかみ松カサネ諸カサネ木カサネ秋カサネ小カサネあひて

色カサネかみ松カサネ枯カサネるカサネ松カサネのカサネ

色カサネかみ松カサネ賞カサネでカサネ

色カサネかみ松カサネ諸カサネ木カサネ秋カサネ小カサネあひて

色カサネかみ松カサネ枯カサネるカサネ松カサネのカサネ

色カサネかみ松カサネ賞カサネでカサネ

色カサネかみ松カサネ諸カサネ木カサネ秋カサネ小カサネあひて

色カサネかみ松カサネ枯カサネるカサネ松カサネのカサネ

色カサネかみ松カサネ賞カサネでカサネ

破芭蕉

秋風ふやぶらうらう
世のころろろこころふ

たんと多く哥ふとあり

非 秋風ふあそそふあそふとあり

非 秋風ふあそそふあそふとあり

千土生 千土田。櫓。縮。孫。稻

千土生 千土田。櫓。縮。孫。稻

とよふ古名ありあひもつ

多 堀川百首

見けせむ田のひつらひこえて

積ふつらふあふつらふ

うら枯 草木のひつらふ

多 夫木 家さむる小神の條系うたて

月吹くふ沙ちよのうき

非 うら枯の葉ふらうらうか加翠

うら枯の葉ふらうらうか加翠

緑豆引 豆引。小豆引。実のうら

蒼麥刈

排 ほうりもそらふて
若ふ麦も乃の声北鯉

草牡丹

紫衣菊。貴布祢菊
加賀菊。繡絡菊。

京を貴布祢菊といふ大和

にて牡丹といふ中国筋まで

シウメイ菊と云北国にて加賀

菊といふ

佛甲草

俗小岩蓮花といふ
花ひらき実あり

小蓮花

岩蓮花まで葉細
長

菊弱花

むらさき色小さく
葉の長さ二尺が

かりにして天南星に似たり

この月根を掘るなり

櫛實

櫛の俗字といふ
実小大似たり櫛の食

櫛の食とてはたないちの
毛ありかかふ毛なり

梅嫌 子と結んで紅(非)梅(紅)の如く加生

種植 櫻麥、油菜、蒿苳、芥菜、紅花、蚕豆、水仙、春菜、大蒜、小麥、大麥

右の品々此月種をまくべし

移栽 牡丹、芍薬、竹、其外諸の果木此月より

植てようし月令廣義の出より尚又種まいた果木うへへの仕中

諸菜此月取入色々様等まで委しく日本歳時記九月の外に出す

草用意 菓木より実をむきよ方上十五日の内よりゆれ

実多し又菓初て熟とるとは兩手にてとるべし年々実多し

実のうざる木小実の寸法のもいて穴とやり実のう木とゆへるり

菓鳥のうへるり法 熟とる時ツラと取らざらば取り忽鳥をむ

生類 此部より九月一ヶ月諸の生類を集めたるす

尾越鴨 山を越てゆく小朝夕々々き間おとる

此とたの鳥いごふにも隨分山のひくき尾ととりまうり小

越ゆりゆふ名づく其外説多し

熊栗棚か 熊の冬ハ穴ハ入蟻とて春と待

て出て木のかり好んで栗を食ふ又枝と折るく鋪て石巖枯

木の中設く是と熊の架と云

向きのふる木けりや柄とて

大山の麓の空こもり一為家

霜踏鹿 霜うれの尾尻ふ

霜をかき霜ふ麻のぬいふ乙由

方角

家普請 他行 南方
北方向大凶

破軍

子方九ツ	夜方八ツ	寅方七ツ
卯方六ツ	辰方五ツ	巳方四ツ
午方九ツ	未方八ツ	申方七ツ
酉方六ツ	戌方五ツ	亥方四ツ

時刻

酉日戌日。酉刻戌刻。

樂事

此頃や秋冷く木々の色小秋露草々の咲初る

浅茅もつらばさるるも穂
小出て尾花より夜はみくの虫
のひきと見え露もやうくさる
まをさあくはつきうつかる秋の
母のあまのいひつらぐさ

生花式正

菊。川
草。お月。紅葉

○鶴上戸。○栗。○南天
○芦。○岩菊。○山ひらね

衣服式

朔日より八日まで袴と
着と九日より綿入と

着と袴はひき色。○女衣服
も是れ同一模様。心小随ふ

紅葉衣

表は黄裏と
一説表黄裏と

紅葉衣

ねりて黄
黄

養生

此月陰旺。陽衰。小當
小精と固く。神と斂む

ぞし補養の茶と用いて氣と
まをすべし。座臥西南。向ふては

又野外。あつて血脈と養生
なり。風寒。小感。やむ時と

考へてつらむ。一月の未小至り
味の甘き物と辛く又

酸るる物と増し。腎氣と補ふ
委しく。延壽養生論。小出と

蜜柑と夏まを貯る方

杉の箱の

うら小竹とこし糸にてつらつらと
うらと下家燻ぐり小入かくべー

所貯せ三年中貯る方

あつじき梅と

厚このまわりと漆とよくわり壺
小入かくとよくしてかく

飲食

九月一ヶ月食物の類とわろを出と

新蕎麥

◎新蕎麥や客も給
はる蕎麥より可也

新蕎麥と麻子油をすりたり玄米

柚味噌

◎柚釜。柚干
◎非 かりオナ名陽明家へ
タタレ

消し炭や油をふけて俵の上オナ

とち餅

榎の実と持て浸し粉
くちりて團子とす

蒲萄酒

世俗の和制する物を
好酒ふぶとと浸し

置ておれとのわり漢土の制と
ハ異なりべー

九月部終

九月飲食 料理献立

禁 生姜 八九月多く食へ
物 春小至ると眼と病む壽

を撰り筋力と減らす妊婦
これと食へ生る子六指をほむ

◎冬瓜今月食へ反胃と病む
霜ふりて後食べし 孫真人の説

好 雞肉 九月より十一月まで食
物 石一稍補あり他月の宜りす

料理 汁

たまご ぼろ 菜付

くらげご 小かわご

やまご 手房

あまご 白やまご

くらげ たらり

膾

さし たくわん

さいごま かつら

白身 かつら

取のらぬ
本々うげせん芽

きとご・あかい
たろん・せうが
ゆのこ

あまこ・ごよう
おろし・たろん・ゆ

あまい・たろん
おろし・せうが
かん

おろし・たろん・ゆ
あまこ・ごよう

清汁 さけの
ふすま

ひさちぬぐう
三ツ葉

今トはとら
あまけがしあ梅
こしき

きんこ
松さけのうぐ

たけのげ
こしき

差味
いせき・小豆
せんぎ

あまのうげ
せうがのり
こしき

いせき・たろん
本々うげ
せんぎ

ほらいとうぐ
松さけやたて
ゆしやうゆ

たこ・かご
あらうけ

いせき・こしき
かま
あらしぬ

煮物
小豆
せんぎ

あまのうげ
せんぎ
ゆしやうゆ

きんこ
あまのうげ
せんぎ

小豆
あまのうげ
せんぎ

和會物
かまごせん
まううげ

今貝細切
らうろぎ
玉きり

干いっご房
あまのうげ

あまのうげ
せんぎ

あまのうげ
せんぎ

あまのうげ
せんぎ

吸物
皮ふり
せんぎ

あまのうげ
せんぎ

精汁
あまのうげ
せんぎ

あまのうげ
せんぎ

あまのうげ
せんぎ

あまのうげ
せんぎ

あまのうげ
せんぎ

あまのうげ
せんぎ

膾
あまのうげ
せんぎ

あまのうげ
せんぎ

あまのうげ
せんぎ

あまのうげ
せんぎ

清汁
あまのうげ
せんぎ

あまのうげ
せんぎ

差味

松茸 松茸の味
あじ 松茸の味
かき 松茸の味

米 米の味
ゆりね ゆりねの味
まわらじ まわらじの味

清酒 清酒の味
くら くら味の味
くら くら味の味

松茸のり 松茸のりの味
きり 松茸のりの味

松茸のり 松茸のりの味
松茸のり 松茸のりの味

平かん 平かんの味
やま 山の味
やま 山の味

煮物

松茸 松茸の味
松茸 松茸の味

竹筒 竹筒の味
干し 干しの味
干し 干しの味

牛蒡 牛蒡の味
あじ 松茸の味
あじ 松茸の味

たろ たらきの味
まろ たらきの味
まろ たらきの味

松茸 松茸の味
松茸 松茸の味

松茸 松茸の味
松茸 松茸の味

和會物

松茸 松茸の味
松茸 松茸の味

松茸 松茸の味
松茸 松茸の味

松茸 松茸の味
松茸 松茸の味

松茸 松茸の味
松茸 松茸の味

松茸 松茸の味
松茸 松茸の味

松茸 松茸の味
松茸 松茸の味

吸物

松茸 松茸の味
松茸 松茸の味

松茸 松茸の味
松茸 松茸の味



